



TITLE:

服部氏ノ『國際經濟論』ニ對スル
向井氏ノ批評ニ就イテ

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 服部氏ノ『國際經濟論』ニ對スル向井氏ノ批評ニ就イテ. 經濟
論叢 1916, 3(2): 95-102

ISSUE DATE:

1916-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127066>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

經濟論叢

號二第

卷三第

論說

國防稅ノ本質

でうあつぎ・ひゅーむノ經濟學說(四)

資本ノ眞概念ノ發展(二)

戰後ノ人口増加政策(二)

支那近代ノ戸口ニ就テ(三完)

在外正貨ト兌換券ト關係ヲ論ズ

雜錄

服部氏國際經濟論ニ對スル向井氏ノ批評

瀧本誠一氏ノ草莽解題ニ就イテ

福田博士ニ答フ

戰時利得稅ノ諸學說及實例

英吉利ノ新稅

米國ニ於ケル船舶買收法案ニ就テ

經濟雜誌第五

統計書ノ概說

らぐれー「ミール」學說ノ研究(三)

『通俗經濟文庫』ノ刊行

『經濟大辭書』ノ完成

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 河上 肇

文藝博士 米田 庄太郎

法學博士 内藤 虎次郎

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 鈴木 券太郎

法學博士 本庄 榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 岸本 熊太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

商學士 大塚 金之助

法學博士 福田 德三

法學博士 神戸 正雄

(載 轉 禁)

雜 錄

服部氏ノ『國際經濟論』ニ對ス
ル向井氏ノ批評ニ就イテ

河 上 肇

此頃慶應義塾大學助教向井鹿松氏ハ早稻田大學教授服部文四郎氏ノ近業『國際經濟論』ノ批評ヲ『三田學會雜誌』(大正五年七月發行)ニ公ニシ、先ヅ『吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ本書ハ決シテ教授自身ノ研究ノ結果ニ非ズ、又勿論著述ト目ス可キモノニモ非ズ、吾人ヲシテ忌憚ナク云ハシムレバ本書ノ如キハ全然是レ一個ノ翻譯ナリ。吾人ハ本書二十五章中僅カニ二三ノ章ヲ除ケバ、其如何ナル部分ニ於テモ教授自身ノ研究ト見ル可キモノヲ發見シ得ザルヲ悲シムモノナリ』トノ旨ヲ述ベ、畢竟スルニ『國際經濟論ノ三分ノ二ハ A. Sartorius Freiherr von Wal-

tershausen / Das volkswirtschaftliche System der Kapitalanlage im Auslande ノ翻譯ニシテ、而モ大體ニ於テ殆ンデ其逐字譯ト認ムベキモノナリ。……國際經濟論ハ此ノ書ノ翻譯ヲ中心トシ、之レニ Hobson ノ The Export of Capital ノ數章ノ要領又ハ抄譯ト、我國ノ統計及ビ新聞紙上ニ掲ゲラレタル他人ノ調査トヲ附加シ、更ニ著者自身ノ研究ニナル二三ノ章ヲ添付シテ、成リタルモノナリ』ト爲シ、更ニ『國際經濟論』ノ各章ニ就キ一々其出所ヲ列記シ、カクテ『以上二十五章六百六十七頁中、ざ氏及ビほ氏ノ著書ノ翻譯ノ占ムル割合左ノ如シ』トシテ次ノ如キ一表ヲ掲ゲ、

著者	頁數	割合
ざ氏	四五三	約六割八分
ほ氏	九一	約一割四分
其他	一二三	

『而シテざ、ほ両氏ノ翻譯ヲ除キタル残り百二十三頁ノ中ヨリ、更ニ統計其他新聞雜誌ヨリ轉載セル部分ヲ除キテ、眞ニ著者自身ノ研究ナリト認ム可キモノヲ求メンカ、其頁數ハ僅々七八

十頁、總頁數ノ約一割餘ニ過ギザルナリ』ト斷言シテ居ラルル。

二

余ハ元ト我國ニ於イテ眞面目ナル新刊書批評ノ行ハレザルコトヲ歎キツツアル者ノ一人デアアル。サウシテ偶々人ノ注意ヲ惹ク批評ガ出ルト、其ハ多クハ剽竊沙汰ニ屬スルモノナルコトヲモ甚ダ不快ニ感ジツツアル者ノ一人デアアル。

蓋シ我國ニ於イテハ經濟學上ノ研究ノ成書トシテ發表サルルモノノ數ハ甚ダ少イ。然ルニモ係ラズ剽竊沙汰ノ案外ニ屢々隣セラルルハ、是邦人ノ人ノ美ヲ成スヲ妬ムノ甚シキニ因ルカ。抑々又我國ノ學者ノ特ニ學問的良心ノ乏シキニ因ルカ。何レニシテモ不愉快ナル現象デアアル。

此度服部氏ノ新著ニ對スル向井氏ノ批評公ニセラルルヤ、新聞紙ニヨリテハ此問題ノ爲ニ數段ノ紙面ヲ割キシモノアリ、或ハ種々ノ短評ヲ加ヘシ者モアレド、多クハ道路ノ風説ヲ錄スルニ止マリ、記者自ラ原本ニ就イテ調査スル所ナキニ似タルガ故ニ、之ヲ門外漢ヨリ見バ、殆ド

理否何レニ在リトモ判斷シ兼スル有様デアアル。而カモ學界ニ於ケル剽竊ノ罪ハ市井ニ於ケル竊盜ノ罪ヨリモ遙ニ重大ナモノデアアル。元來學問ノ生命ハ眞理ニ在ルガ故ニ、虛言ヲ云ツタリ誤魔化シヲシタリスルコトノ出來ル人間ハ、全ク學者タルノ資格ナキ者デアアル。殊ニ日本モ既ニ大正ノ代トナツテ、政治界ニ於イテモ、從來ハ殆ド默過サレテ居タ罪惡ガ、今ハ新タニ指摘サレテ制裁ヲ加ヘラレツツアル時世ナレバ、殊ニ學界ニ於イテハ、若シ學者ニアルマジキ不徳ヲ敢テスル者アラバ、最早ヤ吾人ハ遠慮ナク之ヲ學界ヨリ葬ルベキデアルト同時ニ、若シ又虛構乃至誇大ノ言ヲ弄シテ妄リニ人ヲ議スルガ如キ者アラバ、是レ亦タ容赦ナク學界ヨリ驅逐スベキモノナリト信ズル。

吾々ハ斯ク考フルガ故ニ、服部氏ノ著書ニ對スル向井氏ノ非難ハ事甚ダ重大ナリト信ジ、煩雜ヲモ厭ハズ、貴重ナル誌面ヲ借リテ、此ノ不愉快ナル問題ニ關シ吾人ノ所見ノ一班ヲ述ベントスル次第デアアル。

三

吾人ハ今問題ヲ限定シ茲ニハ専ラ服部氏ノ著書トざるとりうす・ふおん・わるてするすはうせんノ著書トノ關係ニ就イテ述ブベシ。扱テ向井氏ノ評言ニ依レバ前ニ述ベシ如ク『國際經濟論ノ三分ノ二』ハモ氏ノ著書『翻譯ニシテ、而モ大體ニ於テ殆ンド其逐字譯ト認ムベキモノ』デ、又細カニ其内容ニ立チ入リテ云ヘバ、二書ノ關係ハ略ボ左ノ如シト云フノデアル。(次ニ掲グル各章ノ題名ハ服部氏ノ著書ノソレニシテ、各章下ノ數字ハ其章ノ分量ヲ示ス頁數デアル。)

第四章 國際放資ノ原因

三一

『本章ノ冒頭及第一節ハモ氏第一編第四章 Warum sucht das inländische Kapital das Ausland auf?ノ前半ノ翻譯ヲミテ』第三節ハ同章ノ残り後半ヲ翻譯シタルモノ』『更ニ第四節ハモ氏第一編第三章 Gewinn und Zinsdifferenzen innerhalb der Weltwirtschaftヲ翻譯シタルモノトナリ。』

第六章 國際放資ノ方法

三一

『本章第二節以下ハ悉クモ氏ノ第一編第五章 Die Arten der ausländischen Kapitalanlage und die Formen der Kapitalübertragungノ翻譯ナリ。』

第七章 資本ノ國民性

『本章ハモ氏第二編第二(三)章 Die Nationalisierung des Kapitalsノ翻譯ナリ、但シ第四節資本ノ國民性ト我對支那放資ハ教授ノ附加セシモノナリ、而シテ其頁數ハ僅カニ三ノミ。』

第八章 外國ニ於ケル製造所ノ設立

二三

『モ氏第二編第四章 Die Fabrikgründung im Auslandeノ翻譯ナリ、但シ第六節對支那放資ト製造所ノ設立ハ教授ノ筆ニナルモノ、其量當ニ八行半』

第九章 國際放資上ニ於ケル銀行ノ活動ト國際貿易

四九

『本章ハ悉クモ氏第二編第二章 Das auswärtige Kapital im Dienste der Warensaufuhr und Einfuhrノ翻譯ナリ。』

第十章 國際貸借勘定

二二

『モ氏第一編第六章 Internationale Bilanzenノ翻譯ナリ。』

第十二章 外債ノ應募ニ對スル國家ノ干涉

二四

第十三章 外債義務不履行ニ對スル強制手段

二二

第十四章 外債ノ保護

二二

『以上三章ハモ氏第三編第一章 Anleihe fremder Staaten 中二七九頁ヨリ三二二頁ニ至ル翻譯若クハ叮嚀ナル解説ナリ。』

第十六章 國際放資ト國家ノ高等政策

九

『本章ハモ氏第三編第一章中ノ發部ヲ譯述シタルモノナリ。』

第十七章 國際經濟上資本ノ利用ト國家ノ盛衰

五〇

『本章ハモ氏第四編第一章 Der Rentenstaat. Aus Hollands Vergangenheit. 前半ノ翻譯ナリ。』

第十八章 國際經濟上ニ於ケル和蘭

二六

『さ氏第四篇第一章後半ノ殆ンド純然タル逐字譯ナリ』

第十九章 國際經濟ニ於ケル佛蘭西

二二

『本章ハさ氏第四篇第二章 Die Exportkapitalismus in England und Frankreich 後半ノ翻譯ナリ』

第二十章 國際經濟上ニ於ケル英國

六六

『さ氏同上前半ヲ極メテ忠實ニ翻譯シタルモノナリ』

第二十一章 國際經濟上ニ於ケル獨逸

一一

『さ氏第四篇第三章 Deutschlands weltwirtschaftliche Aufgabe チ抄譯シタルモノナリ。さ氏ノ翻譯ハ之ニテ終ル』

四

向井氏ガ服部氏ノ著書トさ氏ノ著書トヲ比較シタル結果ハ以上ノ如シト云フ。是レ果シテ當レリヤ否ヤ。

先ヅ國際經濟論第四章トさ氏第一篇第四章前半トヲ比較スルニ、吾人ハ次ノ如キ事實ヲ發見スルノデアアル。

本章ノ冒頭ノ緒言ト看做スベキ部分ハ最初一頁ト一行ダケノ所ガ、さ氏四二頁第十七行ヨリ四三頁第十二行ニ至ルマデノ翻譯ト爲ツテ居ル。併シ其ニ續ク殘リ三頁分ノ所ハ、さ氏ノ著書中之ニ對應スルモノ無キヤウデアアル。

次ニ本章ノ第一節ハさ氏ノ四三頁第二十行以下四五頁ニ亘ル間ノ本文及ビ脚註ノ大要ヲ傳ヘタモノデアアル。大體ニ於イテ自由ナル翻譯ト言ツテ差支アルマイ。

第三節モ亦タ六〇頁ヨリ六一頁ニ亘ル間ノ四行及ビ六四頁ニアル節末ノ五行ヲ除カバ、一々其ニ對應スル部分ヲさ氏ノ書中ニ發見シ得ル。即チさ氏四六頁第九行以下四七頁第二十七行マデ、四八頁第十九行以下五一頁末ニ至ル迄ノ意味ヲ傳ヘタモノガ本節デアアル。

第四節ハ始メノ六行分ト終リノ十六行分トヲ除カバ、マタ大體さ氏ノ紹介デアアル。即チ本節ハさ氏第一篇第三章ノ二九頁ヨリ四一頁マデ(中ニハ明カニ省略セラレタル部分モアル、例ヘバ三四頁第三行ヨリ第二十三行マデノ如シ)ノ抄譯ナリト云ヒテ差支ナカルベキモノデアアル。要スルニ第四章ニ對スル向井氏ノ評言ハ極メテ嚴密ニ言ヘバ聊カ強キニ失スルケレドモ、大體ニ於イテハ當ヲ得テ居ル。

第六章ハ其第一節ト第四節ノ結末一頁六行分

ダケノ所ヲ除カバ、向井氏ノ言フガ如ク全部ぞ氏ノ翻譯デアツテ、即チ茲氏五五頁第十四行以下六九頁末マデニ相當スルモノデアル。尤モ原文ニハはんぶるくトアルノガ服部氏ノニハ日本トナリ、めきしこトアルノガ上海トナリ、まるくガ圓ニナリ、ぶれーめんガ大阪ニナリナドシテ居ルガ、ソレダケノ加工ノ爲ニ翻譯ノ名ヲ免ルルコトハ出來マイ。章末ニ參考書トシテぞ氏ノ著書ヲ掲ゲナガラ、其頁數ヲ示サザルガ如キモ他ノ場所ニ於ケルト同ジク、甚ダ不穩當又ハ不親切ノ處置デアル。

第七章ハ、向井氏ノ批評ニ依レバ、僅カ三頁ヨリ成ル第四節ノ全文ヲ除ケバ、残りハ全部ぞ氏第三篇第三章ノ翻譯デアルト云フノデアルガ、此斷定ハ酷ニ失シテ居ル嫌ガアル。若シ吾人ノ燥忽ナル比較ニシテ幸ニ過誤ナキヲ得バ、本章ノ緒言、第一節、第二節ノ三者ハ、之ニ對應スル部分ヲぞ氏ノ書中ニ發見シ得ザルガ如クデアル。併シ第三節ハ（一四六頁第十一行ヨリ次ノ頁ノ第十行ニ至ルマデヲ除ク外）、ぞ氏第

二篇第三章一五六頁第八行以下其章ノ終リニ至ルマデノ自由ナル抄譯トモ言フベキモノデア

ル。第八章ハ、向井氏ノ言ニ依レバ、ぞ氏第二篇第四章ノ翻譯デ、只其第六節全部即チ八行半ダケノモノガ纔ニ服部氏ノ筆ニ成ルト云フノデア

ルガ、之モ聊カ酷デアル。即チ第六節ノ外、本章ノ冒頭ニアル二頁分ノ所ハ、ぞ氏ノ書中之ニ對應スル部分ナキガ如クデアル。而シテ其他ノ部分ハぞ氏一七一頁第二十三行以下ニ對應シテ居ルケレドモ、抄譯又ハ解説ト云ツテモ可イ位ノモノデ、單ニ之ヲ翻譯ナリト云フハ聊カ過ギタルノ嫌アリト思フ。

第九章ハ、向井氏ノ言ニ依レバ『悉クぞ氏第二篇第二章ノ翻譯ナリ』ト云フノデアルガ、之モ嚴密ニ言ハバ酷デアル。即チ若シ吾人ノ早急ナル比較ニ過失ナカリシナラバ、本章ノ第一節全部、第二節全部、及ビ第三節ノ始め七行分ダケハ、ぞ氏ノ同章中ニ對應スル部分ヲ見出サヌノデアル。又第四節ノ結末ノ所一頁ト四行分ダ

ケハ、著者自身ノ言ナリト見ルベキデ有ラウ。但シ本章中、分量ニ於イテ大部分ヲ占ムル第四節ハ、冒頭ノ數行ヲ除キ、二〇五頁ヨリ二二五頁ノ第十行目ニ至ルマデハ、ざ氏ノ一二六頁ヨリ一五一頁ノ中程ニ至ル部分ノ翻譯ト解説トデアツテ、多少省略シタ所モアルガ、其分量ハ僅カデアル。

第十章ニ就イテハ向井氏ハ是レざ氏第一篇第六章ノ抄譯ナリト斷ゼラレ居ルモ、之ハ稍々過酷ナル評言デアアル。吾人ノ見ル所ニ依レバ、本章ノ第四節(八頁)ノミハざ氏八一頁ヨリ八六頁マデノ抄譯ナリト認ム。然レドモ冒頭ノ緒言半頁ハ元ヨリ、第一節モざ氏ノ書中之ニ對應スル部分ヲ見ズ。第二節ノ内容ハざ氏七三頁以下ト相應ズルモノナレドモ、タタ其大意ヲ承ケテ要領ヲ叙述シタルモノト認ム。第三節モ亦タ同様デアアル。

第十二章、第十三章、第十四章、第十六章ニ對スル向井氏ノ批評モ、嚴密ニ言ハバ多少過酷ナル所アレドモ、煩シグレバ一々掲ゲズ。

第十七章ハ一般論ノ部分ノ最後ノ章デ、而カモ五十頁ニ亘ル分量ノ最モ多イ章デアアル。向井氏ハ又此章ヲ以テざ氏第四篇第一章前半ノ翻譯ナリト一概ニ批評シテ居ラルルガ、之モ大分酷ニ失シテ居ル。ざ氏ノ第四篇第一章ハ二十四頁デ、其前半ノ Der Rennerstat ハ僅カニ十頁デアアル。文牀ノ冗簡、植字ノ疎密ニ如何程ノ差異アリトモ、十頁ノ翻譯ガ五十頁ノ本章ヲ成ス筈ハアルマイ。現ニ吾人ノ早急ナル比較ヲ以テスル時ハ、ざ氏ノ書中同章ノ記事ニ對應スル部分ヲ見出シ得ザル内容ハ少クナイ。例ヘバ第一節三七四頁ヨリ三五七頁第七行ニ至ル部分、三七七頁第二行ヨリ三七八頁第八行ニ至ル部分、第三節ノ全部、第五節ノ全部、第六節ノ始メヨリ四〇七頁第十一行ニ至ル部分、四一八頁以下章ノ結末ニ至ル部分、是等盡ク然リ。向井氏ハ何ノ必要アツテ、最モ太切ナル非難ヲ他ノ學者ノ面上ニ加フルニ當ツテ、此ノ如キ誇大ノ言ヲ弄セシニヤ。是レ吾人ノ往々ニシテ了解ニ苦ム所デアアル。

第十八章ハ『ざ氏第四篇第一章後半ノ殆ンド

純然タル逐字譯ナリ』トノ向井氏ノ斷言、動カスベカラズ。

第十九章ハ其材料ヲざ氏ノ書ノ四〇九頁ヨリ四二〇頁ニ得タルハ疑ナケレドモ、向井氏ノ如ク之ヲ翻譯ト云フハ過當デアル。但シ第二十章ニ至ツテハ、向井氏ノ言フガ如ク、成ルホド相應ニ忠實ナル翻譯デアル。

五

以上述ブル所ニ依ツテ見レバ、向井氏ノ批評ハ大體ニ於イテ正當ナリト雖モ、前後ヲ通ジテ常ニ多少ノ誇張アリト認メラル。而シテ此ノ如キハ、他ノ學者ヲ捉ヘテ、學問上最モ厭ムベキ勦竊ヲ敢テシタリト論告スル者ノ態度トシテ、吾人ノ甚ダ敬服セザル所デアル。或新聞紙ガ之ヲ批評シテ、向井氏ガ此ノ如キ批評ヲ公ニセシニハ種々ノ内情私情アルコトニテ、吾等ハ却テ批評者ニ對シテ學者トシテノ心事ヲ疑フト言ヒタルガ如キハ、吾人固ヨリ其言ノ當否ヲ知ラザレドモ、氏ノ斷言ハ、少クトモ人ヲシテ斯カル疑惑ヲ抱カシムルノ餘地アルモノト認ムル。

雜錄

服部氏ノ『國際經濟論』ニ對スル向井氏ノ批評ニ就イテ 第三卷 (第二號二四九) 一〇一

乍併、向井氏ノ批評ニ多少ノ誇張アリタレバトテ、是ガ爲ニ服部氏ハ凡テノ非難ヲ免ルト云フ譯ニハ非ズ。吾人ガ以上略記シタル所ニ依ツテ考フルモ、氏ガざ氏ノ著書ニ負フ所極メテ大ナルハ明カデアル。然ルニモ拘ラズ、氏ハ其凡例ニ於イテざ氏ノ著書ト同列ニ Delm. No. Welt-wirtschaftliche Neubildungen 及 A. Hobson No. The Export of Capital ヲ掲ゲ、然ル後『本書ハ主トシテ右等ノ書籍ヲ其ノ骨子トシタモノデアル。此處ニ右著者ニ對シ謝意ヲ表スルト同時ニ、本書ノ依ツテ成立シタル所ヲ明カニシ置ク』ト云フガ如キ曖昧ナル數言ヲ述べタルノミ。思フニ若シ氏ニシテ此數言ニ隱レ、余ガざ氏ニ負フ所バ既ニ凡例ニ於イテ之ヲ明白ニシ置キタリト言ハントスル積ナラバ、吾人ハ則チ氏ニ與スル能ハズ。何トナレバ、此ノ如キハ、決シテ、學者互ニ相酬ユル所以ノ常道ニ非ザルガ故デアル。五號活字ノ凡例ノ前ニ置カレタル四號活字ノ長文ノ序ヲ見レバ、著者ハ其中ニ於イテ『嘗テ伯林大學わぐな一教授ノせみな一るニ於テ國際資

雜錄 龍本誠一氏ノ草茅危言摘義ノ解題ニ就イテ

本ノ研究ニ參加シテヨリ以來之カ研究ニ從事シ
既ニ數年ニ及ンダ』ナドト述ベテ居ル以上、何
人モ本書ヲ以テ其大半ガ氏ニ據ルモノナリト思
フ者ハアルマイ。是レ其ノ然ルコトノ發見セラ
ルルニ及シデ他ノ非難ヲ免ル能ハザル所以デア
ル。吾人ハ著者ガ速ニ本書ヲ改版シテ之ヲ適當
ノ形ニ改メ、少クトモゴ氏及ビほそん氏ニ負
フ所ヲ一々明瞭ニシ置カレンコトラ希望スル者
デアル。